

令和 5 年 6 月 27 日現在

機関番号：34314

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2021～2022

課題番号：21K19969

研究課題名（和文）新出ポタラ宮倶舎頌写本と漢訳等諸本の比較研究

研究課題名（英文）A Comparative Study of the Newly Available Sanskrit Potala Palace
Abhidharmakozakarika; Manuscript and Chinese Translations and Other Books

研究代表者

田中 裕成 (Tanaka, Hironori)

佛教大学・総合研究所・特別研究員

研究者番号：50912408

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では『ポタラ宮倶舎頌』の校訂版の制作、諸本の比較研究、背景調査をテーマに掲げ、研究を行い、次の三点の研究を行った。

第一に、暫定的な『ポタラ宮倶舎頌』全編に及ぶ暫定的な校訂テキストの制作を完了した。第二に、諸本の比較研究を行った。その結果、有名な「伝説(kila)」の語が諸本間で異なる取り扱いがなされていることが明らかとなった(田中[2022a])。第三に、諸本の背景調査を行った。その結果、AKK V.42-2の調査を通じて、『倶舎論』は時代に応じて常に最新バージョンにアップデートされていたことが明らかとなった(田中[2022b])。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で行う『ポタラ宮倶舎頌』を中心とした『倶舎頌』諸本の比較検討により、漢訳の異読がインド由来であること、著者性のある哲学書であっても思想的立場に基づいて改変されること、異読は思想的立場に由来するものが存在すること、以上の三点が明らかとなった。

従来のアビダルマ研究では梵文『倶舎論』の発見以後、漢訳は等閑視されるようになり、梵文中心に研究が展開してきた。しかし、本研究により漢訳はインド由来の重要な情報を保持していることが明らかとなり、今後のアビダルマ研究における玄奘と真諦の漢訳の重要性が明らかとなったといえよう。

研究成果の概要（英文）：This study involved textual critique of the "Abhidharmakosakarika (AKK)," a comparative study of various texts, and background research. First, I completed a tentative revision of the entire "AKK" text. Second, I conducted a comparative study of the various texts. As a result, it became clear that the word "kila" was treated differently in the various texts (Cf. Tanaka [2022a]). Third, I conducted background research on the various books. As a result, through the investigation of AKK V.42-2, I clarified the new and old information that each of the sources related to "Abhidharmakosabhasya (AKBh)" holds. This revealed that the "AKBh" was constantly updated to the latest version according to the times (Cf. Tanaka [2022b]).

研究分野：人文学

キーワード：異読 『ポタラ宮倶舎頌』 『倶舎頌』 『倶舎論』 世親 玄奘 真諦

1. 研究開始当初の背景

従来、『俱舎論本頌』の研究は福原 [1973, 1974] 『阿毘達磨俱舎論本頌の研究』等によって、二種類の梵本 (Gokhale 本、およびそれを参照した Pradhan 本) やチベット語訳、真諦訳、玄奘訳等との比較研究を通して行われてきた。この研究により、梵本とチベット訳とはきれいに対応することが明らかとなった。その一方で、二種の漢訳には梵本やチベット訳と異なる様々な異読が見いだされ、対応しないことが浮き彫りとなった。しかし、そのような漢訳に見いだされる異読は漢訳者 (真諦や玄奘) が平易に翻訳しようと努め、意識した結果であるとして重要視されることはなかった。このような漢訳軽視の背景には、著者性の無い経典は文言が加筆される傾向にあるが、著者性の有る哲学書である『俱舎論本頌』のような論書は加筆や改変が行われたいとする先入観があったと考えられる。そのため、梵本と漢訳に異なりがある場合、原典に差異があったのではなく、漢訳者の創意工夫によって差異が生じたとみなされる傾向にあった。『俱舎論』に限らず漢訳には大小様々な異読が存在する。漢訳異読の意義は究明されるべきであるが、研究が滞っているのが現状である。

2. 研究の目的

先の背景で指摘した漢訳に対する先入観を構築した土壌として、有名な著者性のある哲学的な仏典 (論書) の梵本は単一写本であることが多く、複数写本を対校研究することが非常に少なかったことが指摘できよう。そのような中、近年、西藏社科院貝葉経研究所 [2016] においてポタラ宮蔵『俱舎論本頌』梵文写本が写真とともに公表され、チベット訳と内容的に同一のものと判断されている (以下本写本を『ポタラ宮俱舎頌』と呼称する) 。ただ申請者が、仔細に検討してみると、この新出写本は、第七葉までは確かに既存の梵本やチベット語訳と同一内容であるが、第八葉以降では書体も変わり、内容面でも特異な点が多く確認できた (一部を田中 [2020] で指摘) 。そしてその特異点の一部は漢訳と呼応し、既存の梵本やチベット訳と非対応であった。つまり、先行研究では漢訳と既存の梵本の差異は漢訳者の改変として軽視されていたが、『ポタラ宮俱舎頌』の発見によって、漢訳の差異はインド原典において改変された差異であることが明らかとなった。筆者の発見 (田中 [2021]) は二つの大きな問題を提起する。

1. 現存する資料は著者性のある哲学的な仏典 (論書) であっても、第三者の思想的背景の違いによって改変されたものである可能性があること、つまりは著者の原意が損なわれたものである可能性があること。

2. 梵本の台頭によって近年の研究で軽視されてきた漢訳の異読は、インド原典に由来する異読が存在する可能性があること。

本研究では、先の二つの問題点を明らかにすべく、『ポタラ宮俱舎頌』の読解と諸本の比較研究を行う。

3. 研究の方法

本研究では、先の二つの問題点を明らかにすべく、『ポタラ宮俱舎頌』の読解と諸本の比較研究を行う。具体的な研究方法は次の三点である。第一に、『ポタラ宮俱舎頌』の校訂版の制作、第二に諸本の比較研究、第三に異読などの背景調査である。

4. 研究成果

本研究では『ポタラ宮俱舎頌』の校訂版の制作、諸本の比較研究、背景調査の三点を具体的研究方法として設定し、研究を行った。その結果、それぞれ、成果を得ることができた。

(1) 暫定的な『ポタラ宮俱舎頌』全編に及び暫定的な校訂テキストの制作を完了した。校訂テキスト制作にあたって明らかになった点を述べると次の通りである。

当該の写本は西藏貝葉経研究所が指摘するように、途中で筆体に変化し、1r より 7v までが一つの写本 (前半写本) 、8r より 28v までが別の写本 (後半写本) となる。前半写本は AKK 3.22 の AB 句で終わり、後半写本は AKK 3.22CD 句で始まる。そのため、一見すると一綴りの写本のように見える。しかし、結論から言えば、本写本は二種類の写本を合わせたキメラ写本である。

前半写本は連声法の差異を除けば現存の梵文とほぼ合致する。しかし、後半写本では前半部では見いだせなかった看過することができない思想的な異読や新出の偈が存在する。

『俱舎論』において世親は毘婆沙師の教義にたいして「伝説 (kila)」の語を付して自身の疑義を表明した。『俱舎頌』においても、kila の語は八回 (1.3cd, 1.28ab, 1.42, 2.1, 3.25ab, 4.27cd, 4.31abc, 5.37) 登場する。この内、前半写本に収められる四つ (1.3cd, 1.28ab, 1.42, 2.1,) については訂正されることなく現存『俱舎頌』の通りである。しかし、後半写本に収められる四つ (3.25ab, 4.27cd, 4.31abc, 5.37) はいずれも kila の語が排除され、代わりに yasmāt

などの文意を損なわない別の語が挿入されている。さらに、後半写本では、世親が毘婆沙師の教義を批判した偈を排除し、代わりに毘婆沙師の教義の傍証となる九偈を新たに設ける。つまり、前半部と後半部は同じ『俱舎頌』であるが、参照した写本が異なり、前半部は現存の梵文に親しい『俱舎頌』であったが、後半部は毘婆沙師の教義に順ずる形に改変された『俱舎頌』であったと考えられる。

また、『ゴーカレ本』では六章の第 51 偈より写本が欠落し、六章の第 67 偈（ゴーカレーは 68 偈と数える）までは蔵訳等から遺梵されたテキストであったが、『ポタラ宮俱舎頌』により当該箇所が全て新たに梵文より回収された。

(2) 第二に、諸本の比較研究を行った。その結果、有名な「伝説 (kila)」の語が諸本間で異なる取り扱いがなされていることが明らかとなった。詳細は次の通りである。

諸本の比較研究として、伝説 (kila) の語が含まれる箇所の比較検討を行った。その結果、四つの偈頌に関しては「伝説 (kila)」の語の消失が認められた。そこで、『ポタラ宮俱舎頌』における kila の語が消失した箇所 (III.25, IV.27, IV.31, V.37) に関して諸本を比較検討した。明らかになった点を整理すれば次の通りである。

伝説 (kila) の有無

(○は kila の語があるもの、Xは kila の語がないもの、Xの後の文字は補語の系統)

	III.25	IV.27	IV.31	V.37
『ポタラ宮俱舎頌』	X異	X同	X (A)	X同
『ゴーカレ本』	○	○	○	○
『蔵訳俱舎頌』	○	○	○	○
『蔵旧訳俱舎頌』	○	○	X (B)	X同
『玄奘俱舎頌』	○	○	○	X同
『真諦俱舎頌』	X異	X同	X (A)	X同
『順正理論頌』	○	X同	X (B)	X同
『顕宗論頌』	X異	X同	X (B)	X同

比較検討の結果、kila 欠落の諸々の『俱舎頌』では kila の語の代わりに存在した単語の対応が認められる組み合わせも多く存在した（上図参照）。

今回の検討結果によれば、田中 [2021a, b] で指摘したのと同様に、『ポタラ宮俱舎頌』と『真諦俱舎頌』は特に同じ傾向を有していることが明らかとなった。また、『俱舎頌』V.37 では『ゴーカレ本』と『蔵訳俱舎頌』以外のすべてにおいても kila の語はなく yatas に相当する訳語が存在した。このことは梵文『俱舎頌』の kila の一部は本来無かった可能性を示唆する。既に『真諦俱舎頌』や『ポタラ宮俱舎頌』で『俱舎頌』が有部の立場に適うように改変されるのを見たが、それと同様に反毘婆沙師の立場から梵文『俱舎頌』や『蔵訳俱舎頌』も一部改変されている可能性を見出すことができた。また今回の検討に伴って、『蔵旧訳俱舎頌』は訳風が異なるだけでなく、『真諦俱舎頌』や『ポタラ宮俱舎頌』のように『蔵訳俱舎頌』と異なる情報を保持していることも明らかとなった。『俱舎頌』諸本は翻訳者の手心が加えられた同本異訳として扱われることが多かったが、今回の検討結果に基づけば世親以後に手が加えられた異本異訳であり、今後の研究においては梵文だけでなく、漢文等の諸本を慎重に扱う必要があるといえよう。

(3) 第三に、諸本の背景調査を行った。その結果、AKK V.42-2 の調査を通じて、『俱舎論』関係資料のそれぞれが保持する情報の新古について明らかにした。このことから、『俱舎論』は時代に応じて常に最新バージョンにアップデートされていたことが明らかとなった。詳細は次の通りである。

本研究では『俱舎頌』異読の背景調査を目的として、新偈の一つである AKK.V.42-2 の研究を行った。AKK.V.42-1 (本来の 42 偈) は「纏を八つとする立場 (八纏説)」から九結の中に嫉と慳のみ数えられる二つの理由を説明する。一方で、AKK.V.42-2 (追加された偈) はヴァイバーシカによる「纏を十とする立場 (十纏説)」の立場から三つの理由を説明する。また、それらと異なり、玄奘訳『俱舎論』と『順正理論』は四つの理由を提示する。これらの対比から、『俱舎頌』諸本のテキストはそれぞれ異なり、特に真諦と玄奘の差異は異なる情報に基づいていることが明らかとなった。さらに、称友の注釈に含まれる情報により、真諦の三因説が最も古く、ついで衆賢の一因説があることが明らかとなった。玄奘訳はこれら両者を組み合わせた四因説が採用するが、安慧釈にも四因説が確認されることから玄奘の勝手な改変ではない。本研究により AKBh に関係するテキストの情報の新古が明らかとなり、AKBh の内容は常に最新の教義にアップデートされていることも明らかとなった。この点については、「新出俱舎頌写本に見いだされる異読と新偈について」として、日本印度学仏教学会にて発表を行い、その内容をまとめ、投稿を行った。(Cf. 田中 [2022b])

従来のアビダルマ研究では梵文『俱舍論』の発見以後、漢訳は等閑視されるようになり、梵文中心に研究が展開してきた。しかし、以上の三点の研究とその成果によって、漢訳はインド由来の重要な情報を保持していることが明らかとなり、今後のアビダルマ研究における玄奘と真諦の漢訳の重要性が明らかとなったといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 田中裕成	4. 巻 69-2
2. 論文標題 新出俱舎論本頌写本に見る毘婆沙師の改変	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『印度學佛教學研究』	6. 最初と最後の頁 901～896
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4259/ibk.69.2_901	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中裕成	4. 巻 71-1
2. 論文標題 『ボタラ宮俱舎頌』新出偈V. 42-2 『俱舎論』関係資料が保持する情報の新古について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『印度學佛教學研究』	6. 最初と最後の頁 376, 381
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中裕成	4. 巻 107
2. 論文標題 奢摩他と未至定	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 『仏教学部論集』	6. 最初と最後の頁 113, 128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 田中裕成	4. 巻 70-2
2. 論文標題 俱舎頌伝説句の改変	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『印度學佛教學研究』	6. 最初と最後の頁 985, 980
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中裕成
2. 発表標題 俱舎頌の伝説 (kila) 句について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 田中裕成
2. 発表標題 新出俱舎頌写本に見いだされる異読と新偈について
3. 学会等名 日本印度学仏教学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------